The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本人のがん
Author(s)	中野, 陽典
Citation	癌と人. 1984, 11, p. 23-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日　本　人　の　が　ん

中　野　陽　典*

日本人のがんの罹患部位は，きわめて特異性を持っており，世界のがん研究者からも注目されています。疫学調査に関係ある文献から興味ある部分を抜粋して考えてみました。

日本人のがん罹患率，死亡率についての詳しい報告は種々の統計白書に記載されていますが主な罹患部位別にその死亡率を各国のそれと比較すると日本人のがんの特徴が出てきます。1975年の46カ国の部位別，年齢訂正死亡率の順位と増えているがんなのかどうかを，主ながんについて検討してみましょう。

すべてのがんを，ひっくるめてみると，日本人は男性で27位（人口10万人に対して148.07人の死亡数……以下10万人は略す）で，女性は33位（92.45人）でいずれも中間より下位で，世界的にみるとむしろ日本は，がんの多発国ではありません。ちなみに男性での1位は，チェコスロバキア（217.72人），女性の1位はウルグアイ（142.50人）です。ただし日本人男性は女性の1位よりも死亡率が高くなっています。一般に男性の方が女性よりも，がんで死亡する率が高いようです。また世界的にみて，がんによる死亡率は20年前と比較してやゝ増加（特に男性で）の傾向にあるようです。

食道がんでは，日本の男性は9位（7.18人）女性は16位（1.66人）です。1位は男性ウルグアイ（16.09人），女性プエルトリコ（5.17人）です。過去20年間で，日本人男性は増加の傾向女性は減少の傾向を示しているがんです。

胃がんについてみると，日本人男性も女性も1位で胃がん王国と言えます。（死亡率はそれぞれ55.87人，28.32人）。世界的にみて胃がんは著しく減少しているがんで，ポルトガルで増加しているのが例外と言えます。ただ日本人での減少率は，それほど大きくなくあまり減っていない国だとも言えます。いぜんとして日本にとって最大の関心をはらわねばならぬがんと言えましょう。

直腸がんを除いた腸のがんでは，日本人男性は33位（5.08人），女性は35位（4.37）です。1位は男性も女性もニュージランドです(15.88人，16.70人)。ただこのがんの特徴は大部分の国で増加しているということです。日本では，この20年間に2倍は増加しています。デンマーク，イギリスで僅かに減少傾向がみられます。

直腸がんでは，日本人男性は24位（5.72人）女性は21位（3.98人）です。1位は男性も女性もチェコスロバキア（12.87人，7.04人）です。世界的にみて増減相半ばするがんで，日本では男女共に増加しています。

肺がんでは，日本人男性は33位（19.86人），女性21位（5.93人）です。1位は男性ではスコットランド（84.76人），女性はホンコン(22.37人）となっています。ただし男性では日本人が増加比最大で，20年前の3.3～3.7倍になっており，女性もニュージランドやアメリカについで増加しています。世界的にみても減少している国は少なく，喫煙，大気の汚染等，世界各国がその対策にのりださねばならないでしょう。

乳がんは，女性のみの比較になりますが，日本人は41位（4.97人）で順位は非常に低くなっています。しかし世界的に多いがんで，41位の日本人でも10万対死亡率で4.97人とそう少い数ではありません。1位はイギリスです（28.00人）。対がん運動がさかんで，治療方法の進歩が著しく，よく対策の講じられたがんであるにもかかわらず世界各国で僅かずつ増加しています。日本でも今後その急速な増加が警告されています。

もう一つ別の文献を繙いてみましょう。この

＊大阪大学講師（微生物病研究所附属病院外科）

（表－1）年令訂正死亡率よりみた高危険国と低危険国（男性）

がんの種類	危険度の低い国	危険度の高い国	高危険国の死亡率／低危険国の死亡率
気管，気管支，肺がん	ポルトガル	スコットランド	7.1倍
胃がん	アメリカ(白人)	日本	7.8
前立腺がん	日本	アメリカ(非白人)	12.4
腸がん(直腸をのぞく)	日本	スコットランド	4.3
食道がん	ノルウエー	フランス	5.9
喉頭がん	スエーデン	フランス	19.8
直腸がん	チリ	デンマーク	4.8
口腔，咽頭がん	イスラエル	フランス	7.2
膵臓がん	イタリア	アメリカ(非白人)	2.3
膀胱がん	日本	南アフリカ	3.3
皮膚がん	日本	オーストラリア	5.5
肝・胆道がん	ノルウエー	日本	5.3
甲状腺がん	ニュージランド	スイス	5.5
白血病	日本	デンマーク	2.1

(Wyndev and Gori 1977より引用)

（表－2）年令訂正死亡率よりみた高危険国と低危険国（女性）

がんの種類	危険度の低い国	危険度の高い国	高危険国の死亡率／低危険国の死亡率
胃がん	アメリカ(白人)	日本	7.8倍
乳がん	日本	オランダ	6.6
子宮がん	イスラエル	アメリカ(非白人)	4.7
腸がん(直腸をのぞく)	日本	スコットランド	4.3
気管，気管支，肺がん	ポルトガル	スコットランド	4.2
直腸がん	チリ	デンマーク	3.3
膵臓がん	イタリア	アメリカ(非白人)	2.4
食道がん	オーストリア	チリ	6.9
膀胱がん	日本	アメリカ(非白人)	2.4
皮膚がん	日本	オーストラリア	4.2
口腔，咽頭がん	東ドイツ	北アイルランド	3.8
喉頭がん	ノルウエー	アイルランド	16.8
肝，胆道がん	ニュージランド	東ドイツ	4.1
卵巣，子宮附属器がん	日本	デンマーク	5.9
甲状腺がん	オーストラリア	オーストリア	4.0
白血病	日本	イスラエル	1.9

(Wynder and Gori 1977. より引用)

表－1，2はAdvances in Cancer Research と言う本から引用したものです。

これをみると日本人はむしろ多くのがんにかかりにくいと言えます。胃がんと肝・胆道がんにかかりやすく，前立腺がん，腸がん，膀胱がん，皮膚がん，白血病，乳がん，卵巣・子宮附属器がんにはかかりにくいわけです。このような結果から世界各国は日本人の食生活，その他の生活環境，風習に注目しているようです。そして日本人の食生活の欧米化に伴って発生するがんの種類に変化が，おこりつゝあることを指摘しています。

国別のがん死亡率の動きをみていくと，胃がんと子宮がんが，また乳がんと腸のがんが同じような動きを示しています。先にも述べましたように生活様式や，環境の因子が，かかわっていることを示しています。各国の食生活の内容を分析したりして食物とがんの関係が論議されていますが，酪農品，砂糖の消費の高い国では，白血病，腸，直腸，乳房，肺，前立腺，皮膚のがんが多く，胃と子宮（頸部を除く）は穀物や豆を多食する国に多くなっているようです。そして酪農品は胃がんとは逆相関しており，穀物や豆は，白血病，腸，直腸，乳房，肺，前立腺皮膚がん等と逆相関しております。こうなってくると，食生活の面では一体どうすれば，がんが予防できるのか，欧米型か，日本型か，一方をたてれば一方がたたずということになります。もちろん調理の仕方や，調味量とかいったものもかかわってくるでしょう。どの食物がどのがんの発がん因子か，また発がん補助因子かわかればいいのですが，まだ断定するに至っておりません。また食物だけでなく，喫煙と肺がん，アルコールと喉頭，口腔・咽頭，食道のがんとの関係なども考慮しなければなりません。

1977年に国立がんセンター研究所々長らの名で発表された，がん予防の常識12カ条は，これらのことをすべて勘案して書かれています。しかも誰にでも実行できることでもあるので感心させられます。ただ皆が，これを実行したとき，どれだけがんの発生がへるのか興味のあることですが，解答をだすことができないのが残念です。（図－1）

（図－1）　がん予防の常識12カ条

1. 偏食しないでバランスのとれた栄養をとる。
2. なるべく同じ食品を繰り返して食べない。
3. 食べ過ぎを避ける。
4. 深酒はしない。
5. 喫煙は少なくする。
6. 適量のビタミンA，C，Eと繊維質のものをよくとる。
7. 塩辛いものを多量に食べない，あまり熱いものはとらない。
8. ひどく焦げた部分は食べない。
9. かびの生えたものは食べない。
10. 過度に日光に当たらない。
11. 過労を避ける。
12. 体を清潔にする。

（国立がんセンター研究所
杉村所長，河内副所長　1977年）

私は外科医ですが，発生したがんを外科的に治癒させようとすることより，発生させなくすることの方ががんの治癒ということではより理想的であると思っています。がんの疫学調査の中から，がんにかからぬための研究の糸口が見出されるような気がして，いつも，がんの疫学に興味をもっています。

参　考　文　献

1. 特集　がん・統計白書――罹患／死亡／予後――　癌の臨床27，1981
2. がん・日本と世界――その動向と病因論　長与健夫，冨永祐民編・篠原出版KK　1980
3. Advances in Cancer Research　32，237－345，1980　Bandaru S. et al